

スリランカと日本、そして TFG の国際協力活動

2012 年は、日本スリランカ国交樹立 60 周年に当たる年であり、日本やスリランカの各地で、それを記念した様々な行事は開催されました。TFG の本部のある鈴鹿市においても、駐日スリランカ大使館との主催のもと、鈴鹿国際大学に事務局を置いた実行委員会を立ち上げ、その記念イベントが行われました。TFG もこのイベントの共催者として積極的に参加しました。TFG の愛知県支部や名古屋支部などからも多数の協力者が鈴鹿市を訪れ、頻繁に行われた実行委員会へ参加しながら、事業を成功させるため全面的に協力を行いました。イベントの開催は 2012 年 9 月 13 日でしたが、その日のために今年初めから様々な形で準備を進めた結果、イベントそのものが大成功だ、ったと評価しています。第 1 部から第 4 部までの 4 部構成のイベントであり、シンポジウム I (日本とスリランカの最新の動き)、セイロン瓜の試食会、スリランカ紅茶の試飲、シンポジウム II (セイロン瓜と鈴鹿市)、などの勉強会にも会場に入りきれないほどの参加者が来られ、特に TFG として担当した紅茶の試飲もあつという間に在庫切れになるほど、大盛り上がりしました。その後はスリランカの民族舞踊団「チャンナウプリ J」による公演も多数の立見席が出るほど、大勢の参加者にぎわいました。

実は、今回の TFG スタディーキャンプの実施は、こうし、った大規模の事業にも TFG が積極的に参加しているときに行われたわけです。言うまでもなく、とても忙しい一年でした。日本とスリランカは国交が樹立された 60 年前のことを思い出すと、スリランカは世界大戦で負けた日本に対して、とてもよき応援者で、あつたことは明らかです。

スリランカと日本は第 2 次世界大戦終了後から交流が、深まってきた原因の一つに、1951 年サンフランシスコ平和条約締結の際にスリランカを代表した当時の大蔵大臣で、あつたジャヤワノレダナ元大統領は、スリランカは日本から戦争で、被害を受けた国の一つで、あるにもかかわらず、日本に対する賠償金を放棄するとし、う発言を行ったことがあると言われています。そのことに対し、在スリランカ日本大使館は下記の通り明文化していません。

対日賠償請求権の放棄：

故ジャヤワノレダナ元大統領は、1951 年のサンフランシスコ講和会議にセイロン代表 (当時蔵相) として出席し、fi.i 悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む (hatred ceases not by hatred, but by love) と言う仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求権の放棄を明らかにするとともに、わが国を国際社会の一員として受け入れるよう訴える演説を行いました。

この演説は、当時わが国に対し厳しい制裁処置を求めていた一部の戦勝国をも動かしたとも言われ、その後のわが思の国際社会復帰への道につながるひとつの象徴的出来事として記憶されています(2009 年 11 月、在スリランカ f 日本大使館ホームページ j より)。

スリランカの要人が日本を訪れる度に公式な場で上記のことが紹介されます。しかしながら、私の経験では、一般住民の中にその事実を認識している数が少ないと感じております。今になってみれば、現在のスリランカは、日本にとってそれほど重要なパートナーだとは言えないことでしょう。人口や、市場（消費者数）、貿易額、資源の量や多様性、面積の広さ、訪問先として魅力等からみて、スリランカよりも日本にとって重要だ、と考えられる多くの国々が世界の中で主軸していることでしょう。

1951年のサンフランシスコ平和条約締結の際の日本に関するスリランカの発言（考え方）は、日本から賠償金を求められるはずだった流れを大きく変えたという事実には代わりがありません。TFGのメンバーらは上記の事を強く認識しており、一般住民の認識が浅いにもかかわらず、彼らは当時のスリランカが日本を応援したことのお返しをスリランカに関するTFGの諸活動を通して行っているところだと私が感じております。考えてみれば、日本では一般的に知られていないそのような事実はTFGの活動の原動力ともなっていたのかを思い出すと、不思議な気持ちとなります。ところで、現在のスリランカはいまだに発展途上国であります。経済力はとても低く、住民一人当たりの国内総生産高は日本の30分の1程度のスリランカでは、現在、政治、経済に関する多くの問題と闘っています。高等教育を受けたがっている若者が多くいるにもかかわらず、その中のわずか3%の若者しか大学入学はできていないのが現状です。その一方、それほど厳しい大学入学選抜試験に合格し、大学で多くの事を学んでから卒業しても、適切な就職場所は見つからないというディレンマがあります。YFG活動のためにスリランカを訪れるときに、大学卒業者によるストライキや「仕事くださしり」ということで政府責任者と交渉している若者の姿も目に浮かびます。私がある時ワヤンノミ州知事と会談を行っているときにも、大学を卒業して長い時間がたっているにもかかわらず就職に就けなくなっている「大卒者」を代表する北西州出身者がWayamba Provincial Council（北西州・州政府庁舎）前で大きなデモ活動を行っていたことを目の当たりにしたことがあります。

発展途上国として高質の人材が国家開発のために必要であり、大学入学がとても難しくなっているスリランカでは、数少ない大学卒業者が国家開発に関して果たせる役割が大きいはずですが、実態はそうではないということに気がつきます。スリランカのような、エリート養成を目的とした国においては、大学を卒業しても就職が見つからないということについて考えると、どうしてなのか不思議に感じるのだと思います。しかし、大学卒業者の多くは文科系であり、現在のスリランカにはそれほど必要されていない分野の人材だと言うことがわかります。スリランカのような発展途上国にとっては、国家開発に関して概念を語るよりは、具体的に成果を出せる人材が認められていると考えられます。現状を見る限り、スリランカで文科系学部学科などを終了する多くの若ものは、理論的知識を取得しているものの、その応用力が低いということは大きな問題とされています。

TFGがスリランカで、行っている国際協力活動の対象者は、原則として中学校以上のレベルの修了者であり、大学卒業者ではありません。研修に選ばれるものは、希望する研修

活動に関連する経済・生産活動の経験者、実務者等であります。このような条件を設けていることにいくつかの理由があります。

まずは、彼らは以前から何かの経済活動に従事していてもそれほど成功していなかったとし、うこと。次に、これからもそのような活動をより改善しながら継続的に行う予定・希望を持っていること。また、TFGの研修プログラムでの研修内容が理解できるほどの識字力を持っていることなどを考慮し、上記のような条件で、各研修コースへの受講者を選出しています。研修に参加した後、自営を営むようになる研修生が多い。

しかし、最近では、インフラが充実していなく、また経済開発はとでも遅れている地域からの若者を研修対象者としていることの問題も改めて発生していることは事実です。例えば、原油価格の高騰による問題がその一つです。インフラ開発、道路整備、公共交通サービスが発達していない低開発地域の中すから、研修生らが生産している農作物や加工食品などを都会まで運ぶのは時間の面だけでなく、費用の面でも大きな負担となってきました。スリランカのガソリンの値段は日本の値段とほぼ同じであること、あるいは、日本などの外国からの輸入車をトラックとして使われているスリランカでは、その購入・販売価格は、日本の値段より数倍高くなっていることから、低開発村から都会への運送・移動費はスリランカの貧しい人々にとって大変大きな負担になるということは想像できるでしょう。逆に、自分たちの出身村では、購買力の低い人が多いため、村内での販売活動にも限界が生じるところが理解できるでしょう。

ですが、上記のような問題があったとはいえ、TFGとしては現状を見ながらそれは無視できない立場にいます。TFGとして最も苦勞することの一つには上記のものがあり、JICAとの協力で実施した「販売ネットワーク構築事業 J」の問題となったのも同じ側面の、移動費のことでした。それに対する解決案も複数を検討しました。結局スリランカの人々が、自分達を中心に考えられるでしょう。このためTFGとしては、なるべく、自分達が直面している問題に対して自分達が中心に話し合ってもらい、自分達の力で舟字決案もしてもらおうと言う解決方法を採用しました。上記に述べた「販売ネットワーク構築事業」で生き残りをした数名の研修生はおりますが、彼らは上記のような形式で、生じてくる問題に対して自分達が話し合いをしながら努力してきました。持続可能な開発につながるのは、上記のような事例です。いつまでも他人に依存しようと考えている人は、いつまで、も独立することは出来ず、継続的に他人の支援を期待することになるでしょう。

国交樹立 60 周年記念を祝うこの記念すべき年で実施された今回のスタディーキャンプでは、日本のよき応援者で、あったスリランカのこの実態を確認しながら、約 20 年前から TFG がスリランカで行われた様々な研修プログラムに参加された元研修生の研修前と研修後の変化の確認や、村人との交流は大きな柱となっていました。最近、TFG は有機農業の側面にも関心を持ち、これからの国際協力活動の転換を図ろうとしています。これに関しては、まだ十分な結果は出ているわけではありません。しかし、それと比べると、今まで職業訓練を受けた研修生のその成果は、少しは見えていることでしょう。その結果はど

うだ、ったのかも、後で出てくる「スタディーキャンプ参加者 J」のご意見を参考にさせていただきたい。

『残酷なテロ活動から 26 年ぶりによりやく平和の影が見えてきたスリランカ』

ところで、スリランカを愛する日本の方々にとって極めて重要なことなので、スリランカのテロ問題についてここでふれておきます。実は、最近におけるスリランカのテロ活動の起点は 1983 年だとされていますが、この年はちょうど私クマラが来日した年に当たります。長い年月をかけてようやく解決できたスリランカのテロ問題に関するスリランカからの情報に加え、国際社会がその問題をどのように見ていたのかということも含めて、分析してみたい。

1972 年の新憲法制定によりタミール人側の民族差別意識が強まり、従来のタミール人政治集団に加え、タミール人の差別を訴える新タミール人政治派「タミール・イーラム解放の虎 J(LITE: Liberation Tigers of Tamil EelaIDa 以下 LITE と呼ぶ) とし、う菊護団が誕生しました。アミルタリングム氏は LTTE 初代議長となり、民族差別を意識した過激な発言を行うなどをしながら武装組織として政府との対立的行動に出ていました。やがて自らの考え方を改め、I 政府との交渉による解決を模索するが、LTTE の一部がその考え方を厳しく批判し暗殺されました。プラーバカラン氏は次期議長となり、「タミール人差別をなくすためにはタミール人の独立国家の実現 a しかない j」という考え方の下、武装勢力による政府との戦いに出ました。これから年月をたちますと LπE の活動とは「スリランカの歩み J」となり、歴史の中に書かれたことになるでしょうが、プラーバカラン氏による国家開発へのダメージを軽視する人は出てこないと期待したい。LπE の資料には、以前、プラパーカランはヒーローと扱われた時は有りましたが、最近、タミール人に対して大きなダメージを与えたという認識で公のところで発表するタミール人もできてきました (2009 年 12 月 29 日、DailyMirror 新聞)。

LTTE 問題に関して私の記憶に特に残っている一つには、2007 年 12 月に来賓として日本を訪れたスリランカのマヒンダ・ラージャパクシャ大統領の話があります。ラージャパクシャ大統領は、日本のマスコミや有力な政治家などとの会談の中で強調していた一つのポイントは、スリランカでの紛争は民族問題ではなく、テロリスト集団との戦いということでした。日本を含む多くの国では、スリランカの問題は民族問題である風にしか考えていませんでした。これは、私が、日本への来賓としてのラージャパクシャ大統領の公お通訳として、大統領は来日してから任務を終了して日本を出国するときまで付き添いでいたからこそ、このことは肌で、目で確認できたことでした。時には、マスコミ関係者が大統領の考え方を批判するような形の質問があったことは、今だからこそいえることです。

私自身は大統領と同様な考えを持っており、その LTTE 問題は、1992 年から始まったスリランカへの「スタディーツアー J」を企画する度に、いつも頭を悩ましていた大きな問題で

もありました。私とともにスリランカを訪れることになる日本からの大事な友人達の身の安全は確実なのか、そしてテロ問題が起こっている在中のスリランカ訪問は、参加者にとって楽しい、思い出になるのかどうか、常に大きな悩みでした。テロリストのターゲット、ツトは主として政府の有力者でしたが、時には一般住民を対象とした無差別テロ攻撃もありました。LロEが世界的にみても危険なテロ組織となりましたが、LπE指導者によりインドコントロールされたタミール人若者に構成された「自爆テロ派J」の活動は、人々を脅かされました。下記に紹介される多くの政府有力者が、LπEの自爆テロ派のメンバーによって暗殺されました。

そういった中、マスコミを通じて日本に伝わってきた情報では、この問題はテロ問題ではなく、(大衆民族である)シンハラ人による(少数民族である)タミール人差別の問題だ、との解釈で、あつたと理解しております。NHKを始め、マスコミ関係者、また日本の政治家からも、2007年12月日本を訪れたラジャパクシャ大統領に対してそのような考え方に基づく質問などがあつたことは記憶に残っています。過去、政府がテロリストに対して停戦合意に応じるように呼びかけた結果、LηEは停戦合意をしたものの、実際にその約束を守らなかったとし、うことは数回ありました。停戦合意の間テログ、ループは、自分たちの支配下地域に居住しているタミール人住民のためだといひ、外国から輸入したとされる多くの「支援物J」を、政府軍や警察の検問所での確認もなく、それらの地域に運ぶことをしていました。停戦合意の間にテロリスト地域に運ばれたものの中に、大量の武器、小型飛行機数台分、さらに潜水艦までもあつたことが最近明らかになったことです。皮肉なことに、その潜水艦の組み立てに関して、ある日本人も関わっていたといわれています。中立な立場で考えられる能力を持っていた日本人であれば、テロリストに対してそのような支援を行うことはしないでしょう。

結局、2007年末日本を訪れたラジャパクシャ大統領は、上記の現状を日本政府に対し説明し、自分の任期終了期までにこの問題を解決したいというg齢、意志を表明しました。相手は危険な武装勢力を持つテロリストであるため、武力による攻撃力を持つ限りこの問題は解決できないということも強調しながら、日本の理解を求めました。

テロリストが殺害した人々の中にスリランカの有力な政治家が多く含まれていました。プレーマダーサ大統領、ラリット・アツラットムダリ大臣、ガーミニー・ディサーナーヤカ大臣、ウィジェーラトナ外務大臣、コッペーカデュワ陸軍最高司令官などの、スリランカの現代歴史の中で主力リーダーとされる多くのシンハラ人や、カディラガーマル外務大臣、ドレイアッパ・ジャフナ市長を含む多くのタミール人政治家、アミルタリンガム元LITE議長、またインドのラジーブ・ガンディー(元首相)などがその中の数名として紹介しておきたい。そして、テロリストによって破壊されたものの中には、世界遺産として認定されている3か所(キャンディーの仏歯寺、アヌラーダプラ菩提樹寺院敷地、ポロンナルワ遺産のガルピハラ寺院)にさらにはスリランカ国際空港及び現地の飛行機数台、コロンボ市内や地方の空陸軍基地、スリランカ中央委尉子建物など、ここで書ききれないほどの多

くのものがあります。

停戦合意に応じる約束をしながらそれを守らないテロリストに対する政府軍による集中攻撃が、2009年に入ってから行われることとなりますが、この間テロリスト側も、アメリカの同時多発テロ事件を思い出させるような、小型飛行機によるコロombo市及びその周辺への攻撃を行われました。しかし、テロの活動は大きく制圧され始めました。政府軍とテロリストとの最後の戦いで、あった5月18日、LTTEのプラパーカラン議長を含む数名のリーダーが死亡しました。ラージャパクシャ大統領は、5月19日テロリストとの戦いの終結宣言をし、スリランカは26年間にわたる、テロリストとの長い戦いからようやく解放される姿になりました。現在、スリランカは約20万人ともなる多くの難民を抱えており、政府はその対応に追われている姿がうかがえます。しかしながら、テロ活動がいつどこで行われるのかだれもが想像もできなかった過去と比べ、タミーノレ人・スリランカ人両国民がおおきな安心感を持てるようになったことは事実です。

『LTTE 制圧後のスリランカ、そしてTFGのこれからについて』

上記のように、約20万人とも上る多くの国内難民を新たな社会問題として抱えるようになったスリランカですが、以前比較してより安心してスリランカを訪れる時がようやくやってきました。TFGとしては、難民問題に対する支援を行う余裕や、ノーハウを持っていませんが、従来行ってきた若人を対象とする職業訓練や貧困者の経済的・社会的自立に対する支援は可能な限りこれからも行っていくことになることなのでしょう。これは、むしろ、TFGの強みでもあることから、これからの活動も可能な限りTFGが得意とする分野を対象に行っていくべきことなのでしょう。

『スリランカの開発の現状と村人の生活について』

スリランカは発展途上国ですが、最近、他の国と同様に、様々な面において開発は進んでいるのです。特に最近10年ほどの期間での発展は目覚ましいものです。以前TFGが若者の自立支援などを行った多くの低開発村は、当時、電気は普及されていなし村へのアクセス道路も貧弱のものでありました。しかし、最近、その多くの低開発村に対する基本的なインフラが充実してきており、多くの村に電気が支給され、アクセス道路の状況も以前より「改善」されています。そのため、これらの村においても大きな変化が起こりつつあります。この報告書の他のところでは、低開発村のアクセス問題などを指摘していますが、ここでいう「改善」は、以前と比較したものであることを確認していただきたい。

しかし、村人の一部は、その流れについていくことはできず、貧困問題で悩まされている人も少なくない。

片方では、このような低開発村で、日本では見られない大変貴重な側面を体験することはできます。それは、健康に関することです。

自分達が住んでいる場所で、様々な植物、ハーブ類、香辛料などは自分たちの手で需是培すること、低所得のため化成肥料などを購入しにくいことから仕方がなく有機肥料（コンポスト、牛糞など）を使うことが一般的です。そして、食事に関しては、町のスーパーなどで購入するものは少なく、家庭菜園の植物、作物、イモ類や自然があふれている村で、ほとんど無料で調達できる材料で料理などを行っている場合があります、スーパーに頼っている日本のような固と比べ、大きく異なるものです。

良く考えると、これはとても養沢なことではないでしょうか？特に、野菜などの植物を中心とした料理の場合、そのほとんどは、00 に良い（例：樹齢多く、消化しやすし、尿をきれいにする効果がある。）、等と言われる場合が多い。

これは、体が病気になってから、その病気を薬で治すことではなく、日常的な食べ物を通して体を病気にさせないような工夫を行っているということで、はないで、しょうか？認識の違いはあるのですが、そのようなところを是非体験して下さい。

農村が中心の低開発地域を訪問すると、昔と比較して家庭に電気が普及され、村へのアクセス道路も良くなっているかもしれませんが、家庭内のどれほどの植物を植えているのか、可能であれば村や庭を散歩し道路横などでどのような植物は自然に生きているのか、どういうものは住民が自らの意思で栽培しているのか、そしてそのような植物の効能、効果はどうし、うものなのか、どのような使い方をするのかを、少しでも経験して頂きたいです。こういうところを訪問すると、健康に対す督、識が大きく変わるかもしれません。

『TFG とスリランカ：新しい事業の展開について』

そして、TFG はこれからスリランカと日本をつなげる新しい事業の実施も検討しています。すでに、セイロン瓜という、スリランカや他の熱帯国にある健康野菜を日本で紹介する事業にも協力をしています。そのほか、十数年前からスリランカで植林事業の一環として、ハーブ類も農民に百聞していましたが、最近、その中の一つの苗種類であったシナモンは、これから日本とスリランカをつなぐ新しい軸になるのではないかと考えています。TFG の農場でのシナモンは和音しており、実は、そのことがきっかけで、スリランカのシナモン栽培担当公社は、北西州にもシナモン栽培が適しているという認定を行った経過があります。と言うのは、北西チ！抗おいてシナモン初音普及は、TFG があったからのことだと言うことです。TFG が日本に紹介するスリランカの産物の一つにもこのシナモンがあります。シナモン入り紅茶は、関係者の間は大人気ですね。血管の循環は良くするだけでなく、皮膚の老化防止など、その効果は大変期待できるスリランカの一つの特産物です。詳細についてはこれからで、しょうが、是非楽しみにしていただきたい。

そして、2013 年 8 月も、スタディーキャンプの実施を予定しておりますが、その時は今

まで以上に実ある訪問になればと考えております。

これからも、TFGの国際協力活動を支援させていただきますよう、よろしくお願いいたします。

アーナンダ・クマーラ

NPO 法人タランガ・フレンドシップ・グループ理事長